

井椎しづく五行歌集

『慈雨』

アムリタ

笹舟は、より遠くへ

芳川未朋

雨の日に届いた。めぐる毎に顕われる仕掛けも嬉しい、なんと愛らしく、うつくしい歌集でしょう。

口づけて

日々

吸いとりたような

さざめく流れがある

雫

本流だけが

たたえて

一番遠くまで

蕾

笹舟を運ぶ

たっぶりの潤いをたたえた一首一首と対話しながら、一とおりの歌集を読み終え再びめくると、二首めに置かれた一粒の雫が目配せするように循環をささやく。そして今度は、笹舟の目線ですづくさんの旅に同行する。

母は

いまでも

私の前髪を

なでつけながら

話しかける

私を見上げ

まっすぐに

見つめてる

愛してるの瞳だ

愛してほしいの瞳だ

とりわけ心ひかれる二首。この母の前ではワタシはたちまち幼女と化す。ちんまり座り、目の前に伸びてくる掌を、そして体温を感じる。また、まっすぐ見つめてくる瞳を受けとめようと著者と同化する。しづくさんは闘病の辛さを大仰に語らないが、背景を知ればさらに母と娘、娘と母の慈しみの循環に引き込まれる。

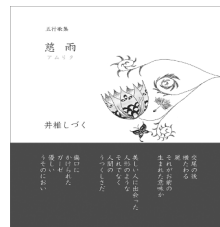
あーもう嫌、ほんとに嫌

嫌 嫌 嫌 嫌

子の放つ「嫌」の文字の

ゲリラ豪雨

頭から浴びる



こんなこともある。これはもう過ぎ去るのを待つしかない。著者も、ソコをよおくわかっていてのゲリラ豪雨なのだ。

きれいな顔を

ゆがめながら

君が歌う

気絶しそうになる

気絶させて

ぼたぼたと

熱い衝動

魂の放射から

受ける

慈雨アズメ

全編にわたっては、沁み入るような呼吸の歌群の中で乱調のごとく置かれた『魂の稲妻』の章。中でも「気絶しそうになる／気絶させて」のフレーズには、本誌掲載の時点ですでに、もっていかれた。

閃光と音響の非日常空間にあって、きれいな顔をゆがめるその人は、ひとときのカリスマだ。チケットを入手した日から始まるライブの絶頂でトランス状態におちたとしても、それは願ってもないこと。その発見を縦ノリで共有したい。そして尚、そこには俯瞰の目も働いているからこそ、チャーミングなのだ。

同章の「魂の放射から／受ける／慈雨」と並べて、原始的な儀式を思わせる先の歌を、この歌集においての「雨乞い」と位置づけるのは飛躍しすぎだろうか。

楽しかったのは

おあいこなのに

あなたはいつも

ありがとうって

告げてくれるね

言葉にすることで

楽になるのを

あえて拒む

あなたの痛みが

伝わったよ

お大事に、も

大変だね、も

書いては消して

「お誕生日おめでとう」

とだけ伝える

『水鏡』の章にも循環がある。人との関わり方がとても丁寧だ。

きっと相手の胸中を推し量り、考え抜いたうえでの平易な語りか
けだから、ちっとも押し付けがましくない。著者の成熟した感性に
ふれることで、いつしか読み手も友人の一人となって潤う。

どこまでが

足の届く深さか

もがくわたしは

自らの丈を

知らない

広い河口で

深呼吸する

ほっとするのは

そこには

誰も立てないから

小さな水面のしぶきに

囚われないで

川底の石は

本当の流れを

知っている

おちついて、すっと立てば、なんとということはない浅瀬でも我を
見失なうこともある。こう書き記しておけば同じ事象では、もう溺

れまい。五行歌の効用をよく表わした一首だと思う。ひらけた河口にたどりついたら一息つこう。潮の香りを思いきり吸い込む。

路地から

わたしは本を読んで

いつも見上げていたのは

育ちました

路地の幅の

王宮の広間や

細くて長い

貧しい家の暖炉に佇み

空

ぼろぐつを履いていました

褒められた記憶が

わたしを支えてる

青木先生

あのね、わたし今

本のデザインしてるんだよ

著者の創作の水源にふれる思いでこの歌たちを見る。しづくさんが、今、在ることの必然を自然の理（理由）とからめながら編まれたこの歌集は、より遠くへ笹舟を運ぶための推進力となるにちがいない。

アムリタ、静謐な豊饒

鳥山晃雄

歌集を一読すれば、作者の人間としての在り様の、豊饒さが伝わって来る。

少女としての、若い女性としての在り様。

あの人

轟け

彼女いるよと

魂（たま）の稲妻

友から聞いて

暗闇を引き裂いて

シーツの沼に

全肯定の

突っ伏したまま

光を見せてよ

恋人としての、妻としての在り様。

そのスカート

つまるところ

いいね

モノじゃなくて

と言われたことがある

心がほしいのだ

今日のお見舞いは

お茶碗を洗ってくれる

これを着ていこう

あなたの背中を見ている

母としての、娘としての在り様。

あーもう嫌、ほんとに嫌

母は

嫌嫌嫌嫌嫌

いまでも

子の放つ「嫌」の文字の

私の前髪を

ゲリラ豪雨

なでつけながら

頭から浴びる

話しかける

下町娘としての、デザイナーとしての在り様。

御祭禮ちようちん

揺れて

まぶたの裏には

わたしだけの

路地がある

褒められた記憶が

わたしを支えている

青木先生

あのね、わたし今

本のデザインしてるんだよ

そして何よりも、深く物思う、うた人としての在り様。

日々

さざめく流れがある

本流だけが

一番遠くまで

笹舟を運ぶ

作者の世界は豊饒であっても、とても静かだ。この静謐はどこから来るのだろうか。かつて作者と「木遣り」について言葉を交したことがある。その時の話から私は、作者には鳶職の叔父さんが居て、作者の結婚式の新郎新婦入場は、鳶の人達が木遣りを唄いながら先導してくれた、と理解している。作者は江戸っ子なのだ。人を押しつけて声高に自己主張するのは粹ではない、という感覚が身に染みみている。そしていさぎよい。自から「死ぬな」と思ったという大病を乗り越えた時、このいさぎよさは、ゆるぎない静謐として作者の中に住むようになる。

では作者の深い物思いの核に在るのは何だろう。

カプトムシの骸

手に取れば

カプトムシのおいがする

カプトムシにしかない

においがする

広大な原にある

無数の命に囲まれて

生きてりゃいいさ

生きてりゃいいと

草木が囁く

ムシは私も子供の頃に親しんだ。ムシはそれぞれにムシくさい。同様にニンゲンも、それぞれニンゲンくさくてあたり前、と作者は言う。そして、草木の囁く、生きてりゃいいさを聴けば、私たちの目の前には「全肯定」の世界が広がる。私はふと、老荘の思想のスケールを思い起こす。けれども作者の全肯定は、現実の生活から自身がかみ取った、存在についての最高の想念なのだ。そしてこの想念は、あくまでも人間のものでなければならぬ、と作者は考える。認知症らしい父上の存在も包み込まれていく。

すきとおった海に

すきとおった魚がいて

でも人間だったら

透明じゃいけないんじゃないか

いけないんじゃないか

どんなに

とんちんかんだって

いるだけいいひと

その存在を

教えてくれた人

作者から歌集を頂いた時、率直な評をお願いします、と添え書きがあった。甘いことばは求めていない。そのかわり、ズレた評言も排除されるだろう。おきゃんな江戸娘は、恐れることなく、自己革新に挑み、一山も二山も乗り越えて、新しい地平を見ることになる

かもしれない。その契機となるものを、求め続けているのだから。

生意気の

看板掲げて

ときどき

ピンタされながら

生きるのだ

できるから

やるんじゃないよ

できるかわからなくても

やってみたいから

やるんだ

しづくというペンネームには意味がある、と作者はどこかで書いていたと思う。その意味を、あとがきの中で明かしている。「雨は、雫そのものでもありません」と。

何もできずに

ただ横たわるだけの

私に

友がくれた

慈雨（あまのこ）

全ての淡水は

雨から

循環して

生まれ変わる

何度も何度も

私も

いつか

誰かに

一杯の水を

差し出すことができるのでしょうか

アマリタの一しづく、私もたしかに受け取りました。

愛と魂の記録

村田新平

井椎しづくという筆名が古歌から採られたこと、市井社の多くの本の装丁者であり、鋭く強い線の裸婦デッサンの描き手であること、事務所主宰から一度紹介されたことがあったこと、特集「河口」の歌人であることしか私は著者について知りません。今回の書評の御依頼に、「七月号の作品評を読んで」とありましたので、若い頃必要があつて新古典主義からロマン主義にかけてのフランス美術史を少し齧ったことがある点に着目されて私に白羽の矢が立ったのかな、と思っています。歌そのものの評価は他に沢山の適任者がおられるでしょうから。

潇洒な意匠のフランス装の本が掌に伝える心地よい重さ、開きやすさ、一ページ一首の贅沢な紙の使い方。雨のしづくを連想させる見返し紙の模様には、表題の慈雨と著者の名前のしづくが込められています。カバー表紙や裏表紙には、蔓草のように細い線の先に、蝶の翅のような模様の花とその香りに誘い寄せられた蝶が一羽、二羽。それに綿毛の付いた種子があしらわれていますが、本体の表紙やその裏表紙にはもう花はなく、蝶だけです。これらの蝶は何を暗示しているのでしょうか。

ギリシャ語のプシュケには魂と蝶と二つの意味があるため、美術

では、蝶はプシケ（魂）の象徴として描かれることが多いようです。プシケの周りに蝶が舞っていたり、プシケに蝶の翅がついていたり、蝶そのものがプシケを暗示していたりします。

とりわけ、ローマ時代のアプレイウスの小説『黄金の驢馬』の中の『クピド（アモル）とプシケ』（愛と魂）の物語、愛の試練と心の浄化の物語は、美術の格好の主題となつて多くの作品を生んできましたが、新古典主義の時代になつて、とりわけ優れた作品を輩出しました。その代表がジェラールとカーノヴァです。

井椎さんは、二〇一一年六月に訪れたルーヴル美術館で、実に精力的に作品を鑑賞し、写真に記録し、コメントを残しておられますが、ジェラールの絵『アモルとプシケ』（アモルから初めての接吻を受けるプシケ）とイタリアの彫刻家カーノヴァの『アモルとプシケ』（アモルの接吻によつて蘇るプシケ）に強い印象を受けました。アモルはクピドとも呼ばれ、ギリシャ神話のエロスのこと。この表紙の蝶と関連があるようにも思えますが、どうでしょう。

いずれにせよ、私はこの歌集を著者の愛と魂の記録として理解しました。魂は迷い、移ろい易く、愛を求めます。愛はエロス（性愛）でありながらフィロス（友愛、思いやり）ともなり、アガペ（無償の愛、至高の愛）を目指します。愛と魂は相携えて歩んで行きますが、作者がそのことをはっきりと意識していることを、彼女のいくつかの歌が示しています。私はその歩み方に関心を持ち、彼女のブログのすべてに目を通し、それなりに彼女を知ることができましたが、この一冊の歌集は、はるかに深く彼女の姿を心に刻む作品群で

した。

この歌集には二百四首の歌が十四の章に分けられていますが、章の配列は必ずしも年代順と言つてではなく、またその分け方は緩やかで、章を越えて互いに響き合っている歌があります。ですから、読み方もかなり自由でいいように思い、私は四月号の特集「河口」の再読からはじめました。

それは二つの点でよかったです。一つは彼女の感受性や人恋しさの原風景、つまり、潮の香りのする隅田川河口や行き交う船の人々、下町の路地と空、父や母からたつぷり注がれた愛情、下町気質、御祭礼などの歌が俯瞰できるからです。もう一つは彼女の考え方の通底音のように流れている、循環する水というイメージが示されているからです。地球を「水の惑星」と呼ぶように、地球の三分の二は海であり、海から蒸発した水は雲となり、雨や雪となつて地表を潤し、やがて川となつて海に戻つてゆきます。その循環がなければ陸上生物の生命はありません。彼女の場合、科学的にその事実を直視していることはもちろんですが、生命も、愛情も、友情も、水の比喩で考え、表現されることが多いようです。

「生意気の看板」や「ジャングルジム」には、やや突っ張つた少女の姿が描かれます。本が好きで、空想を好み、一人ぼっちでジャングルジムに登つて青い空を眺めたり、半べそでポケットに残っているはずのキャラメルをまさぐる少女の健気さ。仲間はずれに傷ついても、かりそめの慰めではなく、自己治療を選ぶ強さ、自分への誠実さ。腰の据わつた歌が並んでいます。これからも生き方を曲げないぞ、という生意気宣言です。

「魂たまごの稲妻」は、忌野清志郎に捧げられた熱く、激しいオマージュであり、彼女の魂の叫びです。彼女の心の振幅の大きさに驚かされました。こんな人だったのかと。

「水鏡」は女性の友人たちの心映えの美しき、笑顔の愛らしさを詠い、それらの友への憧れと憤み深い思いやりを映しています。著者は決して愛想のいい、取り付きやすい人ではないかもしれませんが、虚飾を捨て、誠を持って近づくと人には心を開き、温かく繊細で謙虚な心で、しかも感謝を以て迎え入れてくれるでしょう。まさにフィロスの世界です。

「顔中に降らせて」夫君を詠ったエロスとフィロスとアガベの物語。あえて紹介しませんが、ご自分でお読みください。

「線と色のおしゃべり」美術をめぐる歌。何よりも心に残るのは、彼女の絵を褒めてくれた青木先生への歌。だれもが心に青木先生を持っていきます。私の場合は、小学校四年の時にたまたま図工を担当してくださった故渡利良雄先生です。私も死ぬまでこの先生への感謝を忘れないでしょう。

「足裏あしうらの感あは」深く深い父恋いの歌。幼い日に一生分の愛を注いでくれた父上の記憶が、存在するだけでいい父になった今でも、彼女の無条件の愛アガベの原型であり、彼女の慈雨の源泉です。

「やわらかな東京弁」同性であるだけに、見る視線にはやや距離が感じられるところもありますが、美しい言葉の規範であり、著者に進学を勧めてくれ、今でも著者の前髪を撫でてくれるお母さんのことを詠んだ歌です。

「ゲリラ豪雨」寝顔の眉の美しい愛娘と、木綿のような手触りの夫君を詠った傑作群です。どれを一つなんて選べません。ぜひ全部を

読んでください。夫の寝顔に見とれる作者の姿は、どこかアモルの寝顔に見とれるプシュケの姿に重なって見えます。

「パリの風」著者にとっては新しい展開の契機となるはずのパリの風は、ブログで読んだかなりの歌が削られています。新鮮な経験がよい歌となるまでには、もう少し熟成期間が必要だということでしょう。

字数の制限を大幅に超えましたのでこれで終わりますが、この歌集の最後の歌が、自分是一杯の水、つまりインド神話の神秘的な飲み物「アムリタ」を、他者に差し出す者となるか、という自己への問いで終わっていることに、ご注目ください。また、この本にはEYEマークがついていることにも。

わたしの『慈雨』アムリタ

伊東柚月

待望の井権しづく五行歌集『慈雨アムリタ』が届いた頃、私は体調を崩していた。夕方になると発熱し何もできず床に入ってしまう日々。けれど、この歌集を見るとどうしても我慢できなくなり、気づくと一気に読んでしまっていた。

知らない人も多いと思うが、しづく氏と私は親しい友人である。だから包みを開いた時には、思わず「やったね！」と心の中で拍手

を送った。美しく上品な装丁、本の手触りもコンパクトなサイズもその重ささえも、全てにしづく氏のこだわりが感じられ、彼女の夢が形になったのが分かったのだから。

馨しい

パールレイン
シャラシャラと

降り注いで

大藤翁おほふじの下

薄まりゆく日射しに

愛を乞う

緑が

差し出す

金のスプーン

カプトムシの骸

手に取れば

カプトムシのにおいがする

カプトムシにしかない

においがする

大人も子どもも

転んでは

照れ笑いで立ち上がる

この銀盤のような

世界になれ

しづく氏の世界は柔らかい。それは彼女の話し方や微笑み方とそっくりだ。たんぼぼや芍薬、藤、カプトムシ、工事現場や建築中の家；当たり前存在する小さなものに目を向けるやさしさ。見たまま感じたままの飾らない言葉でそれらを詠う素直さ。彼女の魅力はなんといってもそこだと思う。独自の視点や発想を織り交ぜた表現も秀逸だが、それさえもさりげなく控えめなのは、人柄のなせる技だろう。スケート場の楽しいな雰囲気から世界の幸せに思いを馳せる心は、パソボラなど奉仕活動を長く続ける生き方と切り離せないし、平和への希求とも繋がっている。

この子を残して

死ぬるか と

この子のためなら

死ぬる とに

引き裂かれる

乳児を抱えたまま

亡くなった母

二人とも

助からないなら

わたしも抱き合った姿で

彼女の歌は、真っ直ぐで時に痛々しい。それは大病をしたこととも関係しているかもしれない。自分を曲げてなど生きられない、全力で生きよう、と決心した人の真っ直ぐさにぐっとくる。

きれいな顔を

ゆがめながら

君が歌う

気絶しそうになる

気絶させて

我を忘れるくらい

がむしゃらな彼らに

涙する人がこれほどいるなら

わたしも明日を

信じてゆける

しづく氏はロック好きである。またアート好きでもある。そんな一面は、全体に静かな彼女の歌群の中で刺激的なエッセンスとなつて表われている。必ずしもきれいに整ったものではない血の通ったもの、何かに突き動かされて出てきたものと対峙する時、それが作品であれ人の身体であれ、彼女は驚くほど饒舌になる。

手彫りの

ラインの

手が動いていくと

眠っていた

優美さに見惚れる

まっすぐでも対称でもない

息づいている線だ

言葉の代わりに

線が色が

おしゃべりしてくる

ダンサーは

しなやかな

流線型

すっと立てば

そのまま彫刻

“まっすぐ”の

呪縛から

自由になれ

自然のなかに

直線なんてないよ

表面は穏やかでむしろ寡黙だが、美というものにこだわり、好きなことを語ると止まらない、これはまさに職人気質、下町っ子でもあるしづく氏の本質だ。人を詠う時もその美意識は顕著だ。

ギリリと光る

鉦かね

腰から下げて

植木職人の

削れた頬

美しい人に出会った

人形のような

それでなく

人間の

うつくしさだ

また、次の歌はひとときわ印象に残っている。

下り列車では

だんだん薄く

上り列車は

どんどん濃くなる

わたしの個

これは帰省するときの歌だろうか。通勤電車のことだろうか。いずれにしてもこの感覚と表現力はすごい。彼女の様々な歌を見るにつけ、おそらく人生においても歌作りにおいても、下り列車と上り列車を巧みに乗り換えながら、井樵しづくという個を抑えたり強く出したりして生きているのではないかと思ったりもする。

絶望

の壁に

つるつる滑りながら

生きているそのものが

希望

どこまでか

足の届く深さか

もがくわたしは

自らの丈を

知らない

個の濃い二首。言うまでもなく、個を出すとは我を通すことではない。自分に正直に、真摯に向き合おうとすることだ。ふわっとした彼女の優しさは、人知れずもがく己への厳しさゆえだ。

一方、パリの歌は軽やかで、しづく氏の個は隠れ、翡翠色の瞳やムーランルージュの踊り子のからだにフォーカスする。「ウイと呑みこむ」フランスの歌や、「人類は兄弟」の歌のように大らかに広がっていくところがまた良い。

絵やデザインのない彼女と言葉のスケッチが「河口」の草だ。淡い色合いなのに印象的な絵が浮かぶ。これこそが彼女の持ち味で、ご家族のことを詠った歌にも多く見られる。

慈しむという言葉から

水源 純

船が横切ると
船の人が手をふる
こちら川岸から手をふる
なぜか
そうしたくなる
母は
いまでも
私の前髪を
なでつけながら
話しかける

最後にしづく氏そのものだと思う歌を挙げる。

着ていく服に
迷う朝は
白いシャツ
飾らない自分で
私も
いつか
誰かに
一杯の水を
差し出すことができるのでしょうか
いく

白いシャツの歌は作者自身に対し、一杯の水のほうは他者に対し、
どうありたいかというメッセージだ。これらの言葉を受けとった読
者は、清々しさと優しさに包まれて歌集を閉じることになる。事実、
『慈雨』を読んだ夜、体調が悪かった私が、なぜか熱も上がらずゆっ
たりと眠りにつくことができたのである。
しづく、あなたの歌はすでに充分、私の『慈雨』だよ。

「先生、いい人がいるんです！」

草壁先生にそう言って、しづくさんを事務局スタッフにと推した
のはもう十二年くらい前。しづくさんがインターネット経由で問い
合わせて下さり、AQ歌会に来てくれるようになったころ。数回し
か会っていないのに、なぜそんなふうに見えるのだろう。今、思い
返すとふしぎな気持ちにもなるけれど、なんだかとても自然にそう
思えたのだ。以来、しづくさんとは、歌会と職場、二つの「場」を
共有している。

『慈雨』を初めて読んだときは、懐かしい気持ちで胸がいっぱい
になった。皆で読み込んだへしづく歌がいくつも収められていたか
ら。ざっと計算しても、一五〇回くらい、いっしょにやってきた。

歌会で高点をつけた歌は特に、時を経て、歌集のなかで再会する
と、ふるい友人と会ったような心地になるもので。

お腹にあたる
足裏の感触
今も暖かい
父の上で
飛行機になった
母は
いまでも
私の前髪を
なでつけながら
話しかける

ああ、変わらずいい。これらの歌のなかに備わる温かなもの――
お腹やおでこのあたりに在る「きおく」はつまり、父母から受けた
慈愛そのもの。似たようなものが、私自身のなかにも確かにあった

はずだと思ひ出させる。歌のなかの温もりが、そうさせる。
タイトルにもある「慈しむ」という言葉を、改めて思う。思いな
がらまた読む。しづくさんの受けた慈しみが、そこかしこにある。

船が横切ると

船の人が手をふる

こちら川岸から手をふる

なぜか

そうしたくなる

路地から

いつも見上げていたのは

路地の幅の

細くて長い

空

東京に生まれ育った人は、「故郷がない」と感じている人が多いと
いう統計結果をどこかで見たことがある。でもちゃんとあるのだ。
江戸っ子のしづくさんの歌を読んで思う。船の人との他愛のな
いやりとりも、細くて長い空も、一人の人間を培うに十分なものた
ち。こんなふうに慈しみを受けながらも、しづくさんは土でも、植
物でもない。どこまでも人間だ。だから叫ぶ。叫ばなくてどうす
る！ くらいに感慨で。

すきとおった海に

すきとおった魚がいて

でも人間だったら

透明じゃいけないんじゃないか

いけないんじゃないか

美しい人に出会った

人形のような

それでなく

人間の

うつくしさを

ホームへの

送迎バスに乗り込めば

頭の中で

がらがん鐘がなる

おとうさん、おとうさん、おとうさん

海も魚もすきとおっていれば美しい。すきとおったものへの憧れ
もある。でも人間はちがう。それじゃいけない。「いけない」と、し
かもくり返すところが、しづくさんだ。心の叫びとも言えるこれら
の歌の熱量は半端ない。臆面なく叫ぶこの激しさこそが、私の感じ
てきた「しづく歌」の魅力である。

私を見上げ

まっすぐに

見つめてる

愛してるの瞳だ

愛してほしいの瞳だ

つまるところ

モノじゃなくて

心がほしいのだ

お茶碗を洗ってくれる

あなたの背中を見ている

子の瞳に見たメッセージが、かつての自分の瞳にあったものと重
なった。そして、今の自分の瞳にも。

日常の何とはない瞬間、旦那さんのその背に、とうとう探し当て
た。自分がいちばん欲しかったものが分かったとき、それをほんとう
に大事にできる気がする。だからこれは、ありがとうよりも、愛
してるの歌。

フランスで生まれれば

すべてフランス人

黒、白、褐色、黄

ウイ
と呑みこむ

日本に生まれ育った私たちにはない感覚が、その国にはあたりまえにあった。違和感というよりは、羨望にちかいかいものを、〇Eと酒落て小気味よくうたう。こういうポップさもしづくテイストの一つ。

遠くから

私をみつめて

にこっとする友

可愛いひとを

ハニーと呼ぶ理由がわかる

可愛いってそういうこと。この笑顔に、一回ぜんぶ持っていかれて。この、持っていかれ方がいいのだ。ほとんど身投げしているようなこの感じは、ほかの歌にも見られるが、行ったなりではない、自分にすっと立ち返ってうたうからいい。そういう歌は、すんなり胸にとどくもの。

『慈雨』を幾度も読みながら、たくさんの慈しみを受けて、その豊かな穠りに満足しているだけではないかと思つた。土のままではいけない。叫んだり、何かに身を投じたりしながら、いつか誰かに何かを注ぐものにならなくちゃ。

しづくさんの奥底にある熱量が、歌をとおして、やわらかな雨のように、やさしく私にそう論してくれた。十二年まえの、あのときみたいに、とても自然に。

井推しづく五行歌集

アムリタ

慈雨

傑作と思える歌をあげていくと、「そうではない」という何者かの声が聞こえる。それは、みずいろの声とでもいい声である。彼女を救った慈雨というようなものか、あるいは、そのたざむ水辺の風景か。読者に、その全体を感じていただきたいと思う。

そう思うとき、こういう繊細さで創られている彼女の装丁の数々もまたそのイメージのなかに入ってくるような気がする。

跋「みずいろの声」(草壁燐太)より

四六判変型 仮フランス装 256頁

定価 1296円(税込)

挿画・イラスト 福井雅世 / 装丁 著者

市井社 TEL03-3267-7601

美しい人に出会った
人形のような
それでなく
人間の
うつくしきさだ

